

2022. 7. 31. 主日礼拝説教
聖書：ルカによる福音書5章1～11節
『人間をとる漁師に』

同様の記事はマタイ4;18以下・マルコ1;16以下に述べられています。ルカは少なくともマルコの記事は読んでいたと考えられますので、Q資料という伝承集と共に参考にしながら、この物語を描いたと思われます。それは元来Q資料が持っていた「奇跡物語」の形式を保持しながら、復活信仰の原則に基づいてイエスの「神の子」証言を記そうとしたのです。つまり、ルカにとりましては、マルコのように途中からイエスは「神の子」であるという証言ではなく、初めからそうであったという告白を選択したのです。

まずルカはマルコをなぞらえるように物語を描き始めます。1節の「湖畔のイエス」(マルコ3;9)、「そこでの教え」(マルコ4;1)という具合です。2節「網を洗うシモン」(マルコ1;16,19)、そして「舟上での教え」をマルコ4;1以下「種まきのたとえ」から採用したことを前提にするなら、ここでの「神の言葉」は、聞く者にどれだけ多くの実を結び得るかを、シモンの大漁の記事に置き換えて示そうとしました。

本日の聖書の箇所にはシモン(ペトロ)・ヤコブ・ヨハネの三人が登場します。ご存知のように各福音書を通してこの三人が登場する場では必ずその後には大切な事柄が語られて行きました。ここではシモンのみならず、ヤコブとヨハネという初代教会の三つの大黒柱とも言うべき者たちの召命の契機が語られて行くのです。

そして、この大漁物語は単なる奇跡伝承に終わることなく、「わたしは罪深い者なのです」というシモンの告白によって深められて行きます。こうしてシモンという名前は、初代教会共同体の「イエスの招きとしての代表者を表す名前」に変えられて行くのです。

わたしたちは、これまでの自分の人生というものをかろうじて支えてきた経験や信念、前提としてきた知識、頼りとしてきた力など、そういったものを自分達なりに持っております。しかし、そういったものに疑問を感じ、足許が揺らぐ経験なしに、はたして神を信ずることなど起こりえないと思うのです。

シモンやヤコブ、そしてヨハネも同じだったことを考えます。漁師として生計を立てて暮らし始めて久しい彼らに、「大工」である素人イエスが「網を降ろせ」とほざくのです。おかしいことをと思ったことでしょう。しかし、二艘の舟は魚で一杯になりました。シモンは瞬時にして悟ります。「わたしは罪深い」と……。そこでイエスは応えて言われます。「今から後、あなたは人間をとる漁師になる」と。「今から後」とは古い状態から新しい状態への転換を意味します。

わたしたちにとって、「信じる」とか「信じない」という岐路は、先に述べたような「足許の揺らぎ」の中にあるのです。揺らぎとは文字通り落ち着いた状態のことではなく、冷静でない状態のことでしょう。ですから、そのごに及んでもあまりに冷静であることは、反対に岐路の選択を誤らせてしまうかも知れません。いつも沈着冷静であることも大事なことなのでしょうが、冷静という世界に留まっていたでは知り得ない自分の人生というものもあるのです。冷静が持つ傲慢さがここにあります。

シモン・ペトロが「罪人である」と告白して自らの人生を捉え直そうと踏み出したように、わたしたちもイエスの招きに応じる者になりたく願います。